

始
ま
り
の



思い出

思い出とは実に曖昧で、自分勝手に、様々な色で溢れている。

今の自分は平凡でつまらない人間だが、あの頃は充実して輝いていた、と思える。

実際は今とさほど変わらないのに、自分の都合と曖昧さに改変された過去を振り返る。

わかっている。

それでも過去は随分と素晴らしかったように思えてしまう。

平凡な今とは違って・・・。

小さな村

小さい頃。

俺はよく父親の実家がある山奥の小さな村に泊まりに行った。

普段住んでいる都会とは違って、道行く人が挨拶を交わすし、自然で溢れているし、

何より、自転車で走り回ったって誰にも怒られない。

都会じゃあやれ車の邪魔だの、他人の土地だの、自由が全くない。

自転車で疾走するだけで一日中遊ぶ事ができた俺にとって、最高の場所だった。

森で

祖母に買ってもらった自慢のクロスバイクで、いつもより遠くまで走った。

同じ緑色の景色だが、俺には新鮮で、心躍った。

頭上ではアメリカ空軍の戦闘機が轟音を轟かせて通過していく。

俺はそれを間抜けな顔で見上げた。

・・・ふと、視界の端で何かが動いた。

犬？猫？・・・狸かなあ？

気になって見に行ってみることにした。

・・・森の中に入って、結構自転車をこいだはずだ。

別に何も珍しい物は無く、木漏れ日の綺麗な場所だった。

ちょっと疲れたな。

自転車を木に立てかけて、その場に寝転んでみる。

色んな音が聞こえる。

鳥のさえずり、遠くの飛行機の声、風・・・。

かいた汗が引いていくのを感じる。

気持ちいい。

、その時、見たことも無い綺麗な蝶が頭の上を横切った。

それを目で追ってみると、その先にはこれまた見たことの無い女の子が立っていた。

白い肌と白いワンピース、木漏れ日の中に立っているその姿は、その時の自分にはまさしく天使に見えた。